自由連合

Libera Federacio

No.40 その2

1972 9月1日

姫路市亀山354
自由連合社
振替：大阪1264

めしが食べるのが楽しみで自連に通い万年炊事係。ゆソ・カレーは不評。自連は「めしとみそ汁」だとか。ほんと？（けんいち）

つぶすこと つくること

―＜自連ぶっつぶしキャンプノート＞より―

文責 小川信

貼紙

① アジトは仕事をし、ものをつくるところである。ダベリながらでも手を動かせ。仕事は自分でさがし出せ。

② 来たらまず10円をカンパ箱へ。つぎに黒板に名前を。そして、はじめての顔をみたら、すぐ声をかける。（そこからすべては始る）

③ 「自連をどうつぶすか」イオム130号から連載中。読むべし。

④ 自連「40号のその2・3・4……」引続き発行。そのために、君の「Aアジト行動記」を帰るまでに必ず書くべし。よー書かんヤツは、もう一度仕事をやり直して書くべし。それでもアカンときはサルートンへ来れ？

⑤ 一日一回以上、新人が来るたびに編集会議をやる。君はもう編集社員なのダ。自分のやりつつある仕事について発言せよ。しゃべることがないのは、やらされてるからにホカナラぬ。

⑥ 仕事が目的ではない。やり方、やる過程での問題に気づき、相互に関係する結果が問題ナノダ。

自己紹介

部屋にいる者同士、その名も知らず、口もまだきいていない、というようなことで、どうして＜関係＞を語りうるか。人がきたら必ず声をかける、すぐ名のりあう。（実際は自己閉鎖でしかないような自己紹介を、どう変えるか？）

仕事は原則として二人組み。やりながら話しあう。そのような日常事を、とくに意識して積極的にやる必要がある。新しい人が来るたびに編集会議（編集社員としての会議）。つぶすとは何か。どうつぶすのか。説明者は、いまそれをきいた新人の役割である。その

すべてが自己紹介である。つまり、自己を開くことなのだが、なかなかうまくいかない。

×

☆12日（土）

夕食者は8人。黒川・小村・久保・宮園・石崎・向井・マチコ・司。調理人宮園。シチューにコロッケその他の豪華版。副食費八七五円也。

その夜、宿泊者四人による編集会議。13日午前3時まで。

自連40号に関して

＜40号＞の構成は二つにわかれている。ひとつは、39号のつぎの40号ともいうべき釜ケ崎の記事4頁。もうひとつは、37号からの自連廃刊提起―読者の反応（紹介）に対して、「こういうふうにつぶす」方向の表示―つぶすための布石。＜40号の2＞は、これをうけて＜自連つぶし＞の作業過程を具体的に報告しつつ、それに対する読者の反応をあきらかにするものとしてつくられる。

＜40号の2＞は、つぶす過程そのものに即してでき上らねばならない。だが現在それは＜やめる＞こと自身の意味性からはなれ、それを前提として何かをやろうというところにアクセントがおかれる傾向が出ている。あれもやる、これもしなくては、ということはよいが、それだけでは、いうことはよいが、なぜやめねばならないか、を回避した答えしか出てこない。それは「やりうべくしてなさなかったこと」をやることになるかもしれないが、どうしてもなしえなかったことを確認することはできない。自連の否定的側面を確認するために、どのようにつぶすかは、既成路線としてでなく何度も討論されねばならぬ。＜すべてなければ新しいものはつかめない＞というとき、いまひとりひとりが何をつかみたいかを出しあわねばならない。そのようにしてはじめて、今の自連では不可能なこと―限界が、あきらかにされる。参加者全員をまきこんだ編集会議が今後もくりかえされねばならぬ。

LIBERA・FEDERACIO

アンケートの問題点

第一号以来戻されてきたアンケート数千枚の一枚一枚は、まさに自連社と＜アヤシイ関係＞をつくり出そうとする読者ひとりひとりの姿勢として受取るべきものであった。また屡々その余白にびっしりと書かれた私信風の書き込みに、正しく対応することで＜関係深化＞の道は無数にひらかれていたのである。

にもかかわらずぼくらは、それらを自己満足と慰藉の糧として受取るだけにしてきたのではなかったか。いまさら、それらはとりかえせない。だが改めていま、見おとしてきた＜機会＞―それゆえに＜問題＞―をアンケートの中から取り出し、そのひとつひとつの悔根をたしかめることから、整理の視点を確立することが、基本の姿勢でなければならないだろう。

その上で、手順として、手紙類とアンケを、まず事務通信的ものとそれ以外に分けてから、次のようにしては、という案が出た。

㋐ 27号から横行したアンケジャックへたまたまそこに居合せたものが、ガリ練習をかねて、その内容を自由につくった（29号の共同体、30号の性、31号の釜ケ崎……）などを集約し、文章化する。その過程で討論をやる。

㋑ 各号ごとの「注目する記事は……」等の動向（コメントや数）をまとめることで、読者の意向の傾向や変化をあきらかにする。

㋒ 書き込みや来信の中でのルポや論文もどきのものをピックアップし、発表を考える。

㋓ 質問や要望をのべているもので、一般性をもち、答えるべきものには、意見や回答を討論して出す。

㋔ これらの結果をもとにして、「自連は読者にとって何であってほしかったか」期待された自連像と現実の自連とのギャップ・欠陥を明らかにする。

資料整理の問題

年代順、問題別分類とか、型態と内容別分類などの方法が提案された。「しかし、この資料は【次頁へ】

最終的にどこに、どのように落着くのか。なぜ整理をやるのか」

「たとえば自連文庫でもつくるというなら、それでやり方は自然にきまる。そうでなく自連つぶしの一環としての資料整理というとき、つぶすことと資料整理はどう結びつくのか」

「自連をやめるなら解散大会をひらけばよい。資料は処分するのであって分類、整理の必要はない」

「整理は、例えばトランプのゲームの方法なのか。それとも♡◇といったマークをあわせてならべるだけのことか」

「このように整理目的と主体が不明確なきぎで方針は出せない。自連をなぜつぶすか、どのように つぶすか、をさらに明らかにする必要がある」

共働と共有

8月13日(日)午后四時半～六木、宮園、中島、久保、気田、岡本、向井、黒川)午后の仕事を一段落させて、2号室に集合。

「なぜつぶすのか、わからぬままともかくここへ来てみたというのが、ほとんどの立場だろう。それは実際につぶす作業のなかでわかってくるはずだ」

「それでは何をつぶすのかピンボケになる。ともかくつぶしたというのでは、つぶれたとかわらない」

「なぜつぶすかを論ずることと、つぶしながらその意味を見つけだすことは、にいしてかわらない。むしろいきは、具体的作業を通しての方がよいだろう」

「やめる、つぶす、というのは問題提起の仕方のひとつ。自連を内部からと共に、とくに外側から問われることである。またやめることを実践にして、はじめて部外者だった人がかけつけてきた。そしてへその時〉ではなく、彼はへここ〉で部外者でなくなる。たちまち何をするのか、できるのか。このことが問題となる」

「それでは、いきやめることの意味がぬけおちてしまう。70年代にはいっていて、状況は大きく変っている。ぼくは周囲状況と自連とのギャップを感じる。そのあたりに廃刊の理由があるはずだが」

「人によって、状況が違い、自連への関わり方も違う。その意味では、各々理由づけはちがう。ただ、今や自連は自らを問い直さねばならないということでは、ぼくもきみもちがいはない。やれるのにやらなかったことをやるというのは、単なる後始末ではない」

「かなりニュアンスが違うんですね。やれるのにやらなかったことを、やめることをきっかけにしてやりさる、ということ。ぼくの場合、やれなかったことを確認する、ということと。自連は何であったか、ということを、ぼくは外側から規定しようとしている」

「それでいい。自連とのかかわり方がめいめいちがう以上当然だ」

「ぼくにとっては、自連をつぶす、自分からはなすことで自連が何であったかわかるにちがいない」

「たとえばぼく個人の所有するものだったら、自由に棄てたり譲ったりできる。自連の場合、好き勝手に処分することはできない。オレのものだがオレだけのものではない。ぼくは、オレのものでもあるものを整理、処分するためにここへやってきた」

「資料やアンケは、自連の財産だが、といって誰に帰属するのか、といえば誰でもない。つまり今日アンケ整理をやっていたように、それがどんな意味をもち、自連つぶしとどう関わるのか。作業をしている人が討論したりすることで、問題を共有する。それではじめて、本当の共有財産となる。単に名目的なものが質的なものに転化する」

〈40号〉2〉前夜祭？

「40号〉2は、今までの継続ではなく自覚的意識的につくらなければならないのではないか」

「へその1〉の『案内』のつぶきみたいなものとして、毎日の作業の様子の報告ー財産を共有しさらに処分していくという、自連つぶしで出てくる意味ーを具体的にかかねばならない。投稿もへその1〉より若干進んだものになる筈だろう。

「その1の投稿原稿は、廃刊提起に対して「やめるな」「やめろ」といった反応だったが、へその2〉はつぶすことの各々の意味づけとかいったものを載せたい。しかし、へその1〉に載せきれなかったものが多いので、へその1の2〉といった形になりそうだ」

午後7時、食堂へ会議をうつす。

酒、ウイスキー各一本差入れ。全員でパクツキ、のみ、がせんしゃべり出す。ただしテーマが一つにしぼられることがあっても、数分でチョンやめて紙つぶてがとび、プロレスごっこがはじまり…。ゴキゲンになったK君へ特に名答のため㊙〉かえり道のアスファルト上に大の字になって「なるこせ！」、Aアジトへ帰って、「さて明日からの方針を話しよう」という声に誰も応答なし。

ある日のアンケ整理作業

8月15日(火)午后。二人一組へ向井ー高瀬。甲斐ー中島。岡本ー黒川)で0号～5号のアンケ、手紙集をばらして、まずよみかえす。互いに読んだものについて話合う。問題あるものを全体討議に出す作業。

㊀　このころはいわゆるへはなやかなりしころ？〉で、私信や書き込みに各地の斗争報告が目立つ。いくつかの時期の特徴あるものをえらび出して比較すると、流れが具体化されて、そこから問題をひき出すことができるのではないか、という発見。

㊁　『反戦とか平和ということだけでの行動は無意味ではないか。革命的テロルを是とするのではないが、といって日常主義的主張は物足らない。そういう自分は日和見者でしかないが、日和見的テロルというものはありえないのかも』ということばはたとえば自連の一文化主義、行動技術主義とレッテルを一部にはられている一あり方の批判でもあろう。革命的というとき、ほとんど政治行動に限定されに一般の風潮に対して、自連は消極的であるだけで、しかばへ革命とは何か〉について積極的提起をしないできたということで、この問いに対することにえはまだ一言も語られていない。

㊂『われわれたちは本来何ごとかが好きで、サボタージュやストライキの方が苦痛なのである。何ごとかで憎むべき資本に奉仕していることになるのに、個人の心情はもっと敏感的な自己の満足、なっとくのなかにある』というこの提起を、大状況的論理で切りすてることはできない。どう答えるか！

㊃「同盟や総評の神話を崩すためにどうしたらよいか。一部の先進的労組の斗いを対照としてとりあげるというだけではなく、徹底的にダラカン組合のダラカンぶりをとりあげ、もっともっと書け」という指摘にど

うこたえるか！

㈱当版社の崩壊末期の状況にあらわれている問題―このHの手紙が提示しているものは、今後に伝達されるべき示唆をもっている。

㈠「歴史的にみてもアナ・ボル統一戦線は破産している。行動で一致すればというのでは、ダメなことは全共闘的連合さえ不可能だったことでわかる」という指摘に対して「それでは、気の合う仲間だけより合う以外にないのか」、そうではなく、要員の部分での関係からはじまるへ自由連合論〉を対置しなければならない。その文章化で答える以外にない。それをやりとげる責任が、当面向井にある。

資料整理のなかから

8月16日～25日。〈自連つぶし〉と資料整理と、どう結びつくのか、わからん」「わかる気もするがはっきりしない」という問題をかかえたまま、ともかくやろうという声がつよくなった。資料の山を、とりあえずビラ、パンフ、新聞…というふうに形態別に分けはじめる。

たちまち足の踏み場もない。

「このままでは、どうしようもなくなる」というので、中途から分類を大きかに仕訳けしなおす。

①市民運動、ベ平連関係　㈡個別闘争〈反軍、沖縄、入管、公害などの〉救対及び救援闘争　㈢アナ運動関係　㈣新聞類　㈤ミニコミ雑誌その他である。

六九年からの三年間、年代順に、ついで分類用紙に記入をはじめる石崎君がリーダー。ひとつひとつをさんで、主要内容の注記。金沢からきたN君、ひとつの書きもらしもない詳しい記入に、みんなもていねいになる。

そのなかで資料整理と自連つぶしはどうむすびつくか、依然としてはっきりしないまま、次のようなことが語られ、うき出してきた。

㈠　自連つぶしの意味は、ひとりひとりちがう自連とのかかわり方によって、ひとりひとりちがう。

㈡　たとえば全く自連と関係のなかったものは、自連をつぶすにもつぶしようがない。つまり終りが彼にとってはじまりなのだ。

㈠　言いかえると、40号をはじめて読んで、やってきたS君の場合。つぶす作業に参加することは、むしろ彼自身がその共同労働を媒介にして、あたらしい関係をつくり出すことにほかならない。彼にとって自連つぶしと資料整理がむすびつかないのは、むしろそれはつくる作業であるからだ。

㈡　たとえば、20号位からの読者であるM君にしても、このように自連の内部にはいって、仕事をみんなとやることは初めての経験だろう。もちろん彼は、資料に今まで手をふれたこともない。だからその資料をかつて自己の財産として共有する意識をもつはずもなかろう。それゆえに、いまこの共有する過程の作業は、自己にとっての獲得作業であり、整理作業でないとしたら、当然自連つぶしとは結びつかない。

㈢　自連つぶしを資料整理にむすびつけて提起したのは小川信である。厳密に言えば彼やごく少数の旧編集社員のみが、それを自連つぶしの一環作業としてなしうるものであろうか。しかもその編集社員においても一人一人微妙にその意味〉はちがうだろう。

〈〉このように、自連つぶしの意味がそれぞれにちがいながら、入れかわりたちかわりして多くの人たちが共同して行っている作業の結果総体は、明確に自連の三年半、40号の〈総括〉となっていく。〈そのようなものとして綜合調整されているし〈総括〉はあながち、つぶすことだけのものではない。だが、これらの作業は、自連をつぶすという提起によって引きおこされたものであり、これが最後だという、時間的限定によって、はじめて可能となったものだ。それゆえ作業への参加は早晩にしてとまる。そのやむときまでに作業を終ることによって、自連つぶしを完了させるということがある。

㈠　資料そのものについていえば、整理されたものは、いまのところ富士宮の〈文献センター〉へ送りとどけ、その保管と運用について、各々個人がその行方を見守るということが考えられている。それは、共有をしつつより多くの人々と結びつくことにおいて、より自連らしい処理の仕方であると思われる。

〈次号へつづく〉

訂正　＊P12上段、共闘と共有の項2行目。○木→鈴木。＊P16、19がスィテンクス刷りで読みづらくなっています。

編集室

㈱九月二日、もうできてるかなあ～と思って来たのだが、杉原、下条、吉川の三氏頭をかかえこんで編集室の原稿を書いていた。エリヤいつのことになるかわからん、と思ったのでご出馬となったのです。

エエ最近自出度いことに他称社員ができているのです。もっとも他称といっても私がそう思っているだけかも知れませんが、ともかくその人はアルバイト先にもAアジトから通っている程なのです。

大本営発表―その人の名は―吉川健一。彼は只今〝ぽんず〟なる個人紙も出しています。

エェともかく自連ズッツズシの激務にもメゲず杉原さんともどもガンバッテおられるのです。

〝大阪の地には自連社員は出ない〟とヤジ馬にも書いたけれども、彼がもし自称し出すようなことにでもなれば、私しゃ立瀬がなくなるみたい。でも他称されつづけることによって自称するようになるのは、初手から自称するのとはやっぱり違うのだから、やっぱし私の立瀬は残るのではないかと思います。〈ヤジ馬―久保〉

㈱つぶす直前になってようやく、自連のことを少しは考えるようになって、やって来たのですが、こんなことならもっと前からこうしておけばよかったなどと思っているのです。

どうせつぶすのなら、それまでにせめてかり切りなどの技術だけでも習得できればとは思いながら、実際はなかなかそうは行きません。

つぶれたり、やめたりした経験はあるのですが、意識的につぶそうと云うのは、特にきっちり清算しようとするのは始めてのことで良い経験になりそうです。でも本当につぶせるのでしょうか？　〈吉川健一〉

㈱ホントニ、ジレン、ツブセルンデショウカ、コノチョウシデ。〈下条〉

予告

自連解体サヨナラ東京パーティ

日時、多分10月8日～10日ごろ。

場所　多分ホテルオークラではない。

会費、当日飛入り一万円、前日まで申込み五百円〈通信費参者は百円〉

申込み者にはハガキで通知します。

9月15日〈金・老人の日〉自連ぶっこわし大会　於Aアジト。

今まで参加した人、これから参加しようとする人は全員集合。

近況報告

白川 造

「自由連合」紙を今後どうするかという問題があこっているという。わたしにも、何か書いてくれということであったが、その問題についての意見は、何もない。存在について、必然性を失ったものは、なくなるだろうといえるだけである。「自由連合」紙は、不定形の自由連合派の情報紙であったのか、自立的な思想探求者の表現の場であったのか、あるいは、その両方であったのかは、よくわからない。自由連合派の情報紙であれば、問題は自由連合派内の問題であり、自立的思想探求者の表現の場であるなら、「自由連合」社は、思いきって中性的な出版社となるべきであったと思われるし、両方を兼ねるものであるなら、その編集は自由連合派の対外活動として考えられるべきものなのだろう。

いずれにせよ、問題の不明瞭さは、自由連合という不定型な組織が、〈組織化＝中央集権化〉と矢験的に考えてしまっていることに、容易に身を委ねてきたことに由来していると思われるが、運動が現実的に運動たるためには、不可避の回路をさえも退けてしまったのではダメではないか、というような想いを漠然とではあるが抱かせられているのである。

ともあれ、いままでアンケートにも答えず、良い読者＝社員でもなかったので、そうした感想だけしか伝えられないのであるが、これは、わたしの不服従者同盟の試みの挫折体験からの感想でもある。ほかになにもないので、わたしがいまとりくみはじめている思想論「下降と自立」の、ラロークの介だけを、キサな言い方をすれば、かわらぬ友情の証としておくる。

下降と自立
―ラロークノート―

少年のころ、自分の現実生活は仮のものだ、という想いに捉われていた。それは、若い日に「愛と認識の出発」などを愛読し、四書研究会に関わり、うらぶれた生活の中で士族の末裔であることを支えとしてきた考え方であった。敗戦の混乱の中で、敗弱な体をもつわたしは、自分が不遇の中におかれていることを実感として受けとめていたので、この考えはわたしにとって現実的なものであった。

それゆえ、わたしは、価値の所在は、物質的なものを超越した精神的なものにこそあり、その価値の高さは、一切の混沌を解き明かす、精神のもつ論理性によってはかりうると考えていた。もし一言で、現実的混沌を解明しえたら、現実的なわたしの苦悩はその解決の方途を見出すことで、きっと解消するにちがいないという考えは、形をかえて、わたしの思想を貫いてきたといえる。そこでわたしは、そうした論理を求めるために、正しい読解力でもって聖書や、論語や、ラトンのイデア論や、ラカルトのコギトの主張などを愛読してきたのであった。

わたしは、現実を仮在としてみなければ、とうてい現実を受容しえぬほどに、自らの不幸に捉われていたのである。

× × ×

ところで、現実を仮在としてみるとき、現実肯定者は、仮在を実在として見る愚者に見え、自身は真実在を秘かに知っている逆民にみえてくる。あるいは人は、現実に自身の不遇をしか感じられないとき、観念の内なる家系意識や反現実的価値観によって、からくも自身の生きる意味を見出すものかも知れないのだ。わたしは、友人たちの「家の過去」や「同族のとびぬけた人物」についてのエピソードを語る言葉の内に、友人たちの不幸への捉われをみてきた。わたしもそうであるように、多くの友人たちも、自身の家の過去や同族や、あるいは自身のめざしているものについて語るほどには、現在の自身について語らなかった。

だが、わたしの価値観からすれば、現実的不幸は何らいやしいものではなかったが、それに捉われていることは、いやしいものであると考えられていた。とはいえ、そうした考えによって、わたしが自身の捉われから解放されることは、なかったから、そのことがわたしをいつも暗くさせ、少年的と評しかねぬ友人たちにかくれて、文学治の小説の内に、内心の安堵を求めたりもしてきたのである。

× × ×

しかし、わたしの自己解放の展望だけは明晰であった。わたしが現実から自己を解放するためには、たゞ完全で純粋な、「現実をそのものとして」という切れるような論理を獲得すればよかったからだ。そしてもし、そうした課題を解決したなら、わたしは、自らも不幸に捉われていながら、わたしに対して不幸を刻印する凡ての人々を、わたしに対して屈伏させることも可能であると思われた。

× × ×

わたしは、真実在を、徹底した合理性に貫かれた純粋論理に認めていたので、そうした論理のためには、殺人を極限とする一切の暴力は是認されると考え、また、かゝる論理をめざす全ての問いにおける私は、人間的な死とみなされるべきであると信じていた。とはいえ、わたしが、そうした課題を必ず解決できるか否かということについては、わたしは何ら確信をもっていなかった。そのゆえに、そうした場合の身の処し方の問題は、わたしにいつもうきまとっていたといえる。それについてわたしは、漠然と「自決」ということを考えていたのである。だが、そのように考えたところで、わたしは、現実にわたしに、「殺人」や「自決」ができるかどうかという疑問からは、自由になれなかった。したがってわたしには、完全なる論理の追求に地道にかけたり、あるいは自分の体を実際に切りつけてみたりもしてきた。幼い日の、顔赤らむようなこうした試行の痕は、いまも消えてはいない。

× × ×

こうして、わたしの心的世界では、現実世界の価値は転倒され、わたしの行為は、転倒された価値の実践の積極的ひきうけとして想定されてきた。わたしの現実認識からすれば、現実は錯誤であったが、それは真の合理性に※（二二頁下段につづく）

近況報告的に

織田正和

私はヤマギシズム神戸案内所に居ます。神戸にヤマギシズム案内所というものができてかれこれ三年になりますが、私が来たのは今年の五月、そこで私は何をしているのか……。　何をしているのかと言ったって、何というか、この案内所の室代やら電話代、ミニコミの費用、食費、その他E・L・Cの金をもうけるべくトラックの運転手を毎日している。そして、私の奥さんみたいな女が毎日何本かかかってくる電話番をして「ハイ、神戸案内所ですが」ということなんである。一緒に榎並さんという人がいてこの人が最初やり出し、彼はタクシーの運転手。もう一人前原君という青年がいて、彼は大阪で工方をしている。まぁ、この四人が案内所の一応の住人ということなんである。　そいで金もうけの他は何をしているかと言うと、オ三日旺日の午後から大阪・神戸を中心としたメンバーが集まり、定例の研讃会、何をしているかというより、何をしようかということなんである。二日に一人程度は案内所を訪ずれる人がいて、「あの、私、ブラジルへ行きたいのですが……」とか、ポリさんがパトロール中に寄ってきたり、共同体運動に興味ある人や、それへの何かをやっている人もくる。いわゆる"たまり場・的存在"として、案内所はある。

そういう案内所から今度『魂抛地』という ミニコミを千コッピリ出しはじめた。何かをやろうとしている人たちが、その何かをやれるように、又、その何かが何なのかということも含め、その何かを始めるために！　一人一人の中にあるきたならしいもの、言うに言えないもの、そんなものを吐き出し、吐き出すことによってお互いの関係を今よりもさらにあやしく、うたがわしいものにしよう。そういう人と人との関係を問いながら、自分と社会をどう変えようかと考え、できることからやりつづけよう。ま、そんなところでしょうか。

×　×

てあって『持ったものを手放さねばもそう思う。そして、それは私自身あたらしくつかめない』とある。私への考え、問いつづけねばならないことでもあって、私自身の中にあるきたならしいものをどれ程放出しているか、どれ程放出ということが必要であるかということを自己のものとしているのか。事実をめぐらしてみるとき、なかなかできてはいない。かえって放出というよりも逆に何か自新しいものがあれば私のものにしてやろうなんてことなのではなかろうか。私のものにしてやろうということをまず放出してこそ、私のものへ血や肉にという意味でこにもなるということを実行しなければならないと思う。

なんで自連をつぶすのかということを私は、自連をどう続けるのかという意味でとらえている。やめることへ私は同感する。極端かもしれないが、やめることの連続が各々の人運動〉であるのではないか。つまりは、手放すことの連続が、まさに人生きつづける〉ということではないかと思っている。

私は自連をつぶすことに関して、どうのこうのということはありません。ただ次にどうするかということを千コッピリでも含めたんつぶす〉というつぶし方であってもいいのではないかろうかと千コッピリと思う。そして、話が飛ぶかもしれないけれど、自連をどうつぶすかなんてことを云々言えることは、ある意味では、自連そのものが、つぶすかどうかというところまで進行してきている。一つの壁を乗り越えるへそれが何なのかわからないけれども〉かどうかという、そこのところまでさしかかっているように思う。それはすばらしいことなのではないかと思うんである。私たちの出しはじめた『魂抛地』もそのところへの前進までをまず一つのめやすにしたいものだと思っている。

×

私の今までの体験の中で、それはチッポけなことかもしれないけれど、一人ではあまりにも力量が足りなへ一人の力では何もできないということ、社会そのものへの具体的なアピールができるのだということを身をもって知らされた。一人でもやってやれないことはないという思いは持ちつづけることはできても、他を強烈に動かすへ力量〉にはなり得ないということを……。自連をどうつぶすかという中に、今まで出しつづけてきたという事実が、そのへ力量〉な、つぶすということの行動の中でどう表われてくるか、どれだけのものを成し得たか、それが私は一つの楽しみとしてある。

今まで、あまりにも、どうこれを守りつづけるか、現状の維持をすることが精一パイでへつまりはマンネリ化ということ〉どうつぶすかなんてことなど頭中になかったのではありはしまいか、そこにはつぶすなんて、せっかくここまでやってきたのにおしいのではないかという、つぶすなんてゼイタクだという意識があったのではないか。そういう意識がまさに、共同体運動にしろ何にしろ、運動の中での目に見えない足を引っぱる原因ではなかったのか。自連をつぶす。続ければ続くけれどつぶす、というのはそういうゼイタクだから続けようというイヤラシイ考えを手放すことへの一つの試みとして非常に意味があると思う。

私たちのやっていることも自己のイヤラシイものを手放すことから始めなければならない。自己の変革と社会の変革を同次元のものとしてとらえ直すことからやなと思い、もうすぐ女の腹がパンクするみたいなので金もどっからかやりくりしなければなあと、時々、現実社会のきびしさへ？〉も感じながら、「ハイ、ヤマギシズム案内所ですが……」と、訪ずれるいろんな人と顔をあわすのが楽しみであり、新しい発見へのキッカケみたいなものがないのかいな、なんて思っているところである。

9月3日～27日の集計

この期間中、自連Aアジトへきて自連つぶしに加わった人たちは、のべ一六三名・四八人に達した。

北は福島から南は宮崎まで。埼玉東京、神奈川、愛知・石川・近畿はもちろん徳島・福岡など。五日以上参加者、黒川。下條。吉川。久保。向井。中島。石崎。川村。その他一

行きえのないしんぶんからのごあいさつ〜パッチ、

今、ぼくたちは雑誌で「行きえのないしんぶん」というかり刷でイオムと同じ大きさのしんぶんを出してます。このしんぶんは東京の吉祥寺を中心としていろんな喫茶店・左翼的書店等においてあって、主に高校生・大学生・各表人、そして一部のマスコミ及び公安をその読者としており、現在へ8号〉公称3000部、実質2000部の発行部数を誇っておるのです。

そもそものはじまりは今年の4月末ごろのことで、ひきこうなん間が数名なんどなくいて、いつも「ナンかおもしろいことないかなぁー」というのがあいさつになっていたのです。そしてち月初めに題なしのしんぶん準備号へNO1〉ができたのだが、その時の様子は次のようなものだったと推定されます。

「ナンかおもしろいことあつめたしんぶんみたいなものがあったら便利やなあ」「ぼくらでちょっとつくってみよか？」「そやな、どうせひまやし…」「へナぜかえ反れ〉」「まあ2・3回出してみようやないか。そのうち誰かおっちょこちょいがいたらしんぶんつくるん押しつけよか？」「おもしろい話がわかったらそれでええもんさ」

× × ×

そういうふうにして生まれたち／ケ準備号へ発刊のおしらせ〉は予想通りほとんど全くといっていほどみんなから無視されたのですが、それにもめげずち月25日には創刊号へNO2〉「保守処分はキミを狙う」が出ました。その後も10日に一度ちのつく日に出すことに決め、順調に出しつづけています。

一面はちょっときょっと記事でうめられ、NO3は吉祥寺のイドNO4は「わが敵」へ立川にあるハレ学の連中のコミューンに新ちゃんができたし）からのアピール、NO5は愛の祭の案内、NO6は連帯の呼ぎへもち、あのことし、NO7は7・22エマーソンへぼくらもくいものにしてロックで金もうけする奴こそ敵っ〉、NO8リズムセンター建設のおしらせとカンパ要請、NO9は何かできそうにかいて8月の間は暑いから休み、9月からはまたSEXとのマリファナとかその他すきかってなことをやるつもり。

二面の方はというと、本当はこれ見売りもので、いろんな情報、広告の類がぱんぱんしているのです。例えばアパート求む、部屋貸します。大学の調整を開放します。レコード売りたし。オコあげます。セックスフレンド求む。き永ちょうたい。コンサート、えいが会、フェスティバルのお知らせ。劇やその他御問求む。アルバイト求む。人形をアメと交換します。一緒に同棲する相手求む。自転車安く譲りたし。その他ミニコミ紹介：その他ミニコミ紹介へ名まえのないしんぶんはマスコミのつもりなのですが料理コーナー（いかがわしいものし等々……。

× × ×

ところで、このしんぶんは少々変っているのだけど、お金の方はどうなっているのかというと、一回2ち00円くらいかかるわけです。ぼくたちも微力ながらさいしょのうちはぼくたちでいたし、誰もカンパしてくれなかったので、自分たちで何とか出していたけど、発行部数がふえるにつれて苦しくなってきた。でもうまくしたもんで、発行数がふえると共に人気もでてきりにカンパはあつまるようになり、今のところはカンパでなんとかなっている状態なのです。もちろんそのうちきに評判がおちてくるとなると思うけど、その時は吉祥寺を中心にした地域的なアルバイトニュースという高じで求人広告欄でもうくり、その広告料でやっていけるのではないかと、一石二鳥のはい事をみているのです。

とにかく、おもしろいこと、ためになることと読みやすいことを編集するモットーとして、頭のかたい人へ自連の読者も入いるくし、やわらかすぎてクニャクニャの人へシンナーすってるやつ、ロック喫茶にいる長かいだけのやつ等）もう少しかたまってもらうということを全くでは自分とは関係ないへ納得できない）ものです。

特に東京近辺に住んでる人はどんどんこのしんぶんを利用してほしいのです。㊐で情報広告を送ってくれさえしたら、時手に刷ったり、時には全く無視するかもしれないけど、なるべくしんぶんにのせたり、その見本を送るようにしかけます。また二面用のケチな情報だけでなく、一面全部をのっとるような、ちょっときょっとした情報・広告、アピールも歓迎します。

東京以外の人へ或は東京の北・東・南部に住むん）で、こんなしんぶんにキョーミをもつ人は、自分の住んでるところでしんぶんをつくってみませんか？　場所・地域、題名・ほかにやりそうな人の紹介、情報交換等の努力は惜しみません。しんぶんをつくるおもしろさは自分でつくってみないとわからないのです。さっと自連より評判よくなるヨ。そして全国各地のしんぶんとないに連絡をとって、全国NET・WORKというの自出連合とするんでもどうでもいいけど、そんなことも企んでいます。いまのところ千葉県の野田で「御用」というすごくぼくたちと似てるのが出て嬉しくなっているのです。

特に横浜・京都・大阪のヒトがぼってて下さい。トーシャパンと、一人か二人のヒマな人がいればかんたんにつくれるのです。

× × ×

色まえのないしんぶんをさみたいんは、切手の上ヒノリをぬって東京都三鷹市下連雀5〜7〜31

土屋宛　共同気付　で手紙を下さい。電話は　0422〜22〜944　ぐらい宛で呼び出しマは広告。

編集後記

古瀬義夫

自連への原稿、書けそうにありません。今書くにはボクの内にも外にも材料不足という感じです。

教師になって一年半近くになりますが、学校というワクの中で何をし、又、何を求めるのかということが未だにわからないお話です。先日広島大会で、自民党的なんてコトバがでてきました。自民党的学習態度の首脳……何となくコッケイさを感じ、自民党と自治との関係を聞いたんですが、さくれわからないへ納得できない）ものでした。

ボクが、知って、二十歳　三三

性、創造性は自由な雰囲気、環境の中で生まれ、自然の中で成長する〃と書いたんですが、このことについて感じたことを書きます。

§§§§§§§§§

本来、子どもは過去、いわゆるギャング集団を形成する中で成長してきました。しかし現在はこのギャング集団は変形、もしくは消滅してしまったようです。

ボクも4、5年のころ、(上は中学2、3年、下は小学1・2年)と遊び、ハナシ(?)をしていたことを憶えています。その集団の中で遊び、他の集団との接触、魚つりならびくつれる場所etcについて自然に学んで(?)きました。あなたは記憶ありますか?

ですから、今の子どもたちに遊び方を聞くと、非常に貧しいんです。TV、雑誌、etcによってつくり出された遊びですね。どれかに管理された遊びと言えるでしょう。これは子どもにだけ責任をおしつけるわけにはいきません。大人だって同じ、イヤより悪いのは大人……大人がお金を使い遊ぶから……。いつか小沢昭一かだれかが、〃昔の遊びは、まず作る(創る)遊び、そして、これがたらこれがたものを遊びを工夫する〃というようなことをいってたように憶えていきます。プラモデルではそうもいきませんものね。

現在の学校は、友人層を同一学年に固定化してしまいました。そして、ギャング集団のもつ自由さへ集団の規律はあったが、納得の上のものだったと思うが)などが失なわれたと思う。学校はギャング集団をつくる時間をうばい、空間はどんどんへり、遊び場はまさにつくられた空間なんです。そして遊びはスポーツにおきかえられる。バレー、サッカー、野球……そして地域的にはスイミングクラブ化、ボクは原則的には反対なんです。どうですか?

以上のような状況ですから、これらの芽が出ても成長できないわけです。自然の中で……とは、自然に親しむという言い方、今から見れば危険だと思うところで、そんな大ケガもせず遊んでいたんです。逆に現在は、――禁止、――禁止と危険防止をしながら、やはりケガはあるのです。自然と対決するところでは、細心の注意をもって、そして、学びとったヘギャング集団から)知識を総動員して遊んだのです。今の子どもたちはスマートに遊びの様なことはできても、本当に楽しく遊ぶということをたれに様に感じます。時代の流れでしょうが……。ボクも年ダナーと感じてます。ハイ。

遊びが以上の様ですから、当然勉強もへ同じことが責任の所在につながるが)間違いを排除するということが、学校の特徴です。ですから子供は間違えまいという状態です。しかも正誤によって通信表をつけ、差別・選別の道具にするものですから余計そのうなります。間違いを尊重してもその後の処置の仕方が問題です。評価(差別・選別の意味でのしをしなければいいけれど、そうではないのです。失敗は成功の母なんです。でも失敗は成功の悪魔ですへ安定ミタイナモノ)。

何を言われてもゴモットモ。「しにくなかったらしなくてもいいんだョ」といわれると、ひたすら恐縮する子ども……いかにもボクは権威主義的に見えますね。そんなつもりじゃないことはこの前気付きました。というのは、大正期(?)に児童の村小学校という私立があり、そこの元生徒という人が、中学にいってしたくなかったらやらなくてもいい」といわれ、他の人を見たら、ひたすら恐縮していて「アーン、こんなときは恐縮するものか」と気付いたとか。

気のつくことを書きました。取り急ぎ返事をかねて送ります。お元気で。

上河　ASAI

自連40号に寄書を送る。現在の自分自身を書く。これはある日、茶店でポケットとしていた時に書いた寄書です。

これの人生は何か
それは偽善的だ。
人と語り、笑い、そして怒る
そこには思想性がない
虚義的でしかありえない
常に形式ばったルールでしかない
そのルールの上にのっかった人生
それを人生と人は呼んでいる
これの人生はそんなものではないはずだ

常に創造性のあふれたものだ
ルールにのった人生
それを拒否しつづけ、新しいものの発見
そこに人生が成り立つ
出生、成長、そして死
このルールを固定しきれず
それにあきんじて生きてきたこれ
自然の法則といえばそうかもしれない
しかしその内に存在する空間
それまでがルールとして課せられるのなら
存在している価値はどうか
空間をこれの空間として存在させる
それでこそ人生といいたい
今、これの空間と他人の空間を一つにしようとしている
そこには虚偽の空間が出来るのではないか
環境と性格と性の問題
これをいかにすべきか
自分をみようとする心
自分をみたくないという心
この二つの併合により
自分は生きながらえている
自己の探求により
出てきたものは何であったか
取り去られたものは何であったか
自分をみようとすれば
自分を忘れてしまう
自分をたれるようとすれば
自分をみてしまう
この様な関係で
自分が生きつづけようとしている
正直な自分であればこそ
正直であってはならない
自分とは……

§§§§§§§§§

社告Ⓐ

①・東京都在住者への自連送附は四0号その1より、へしまV君を仲介してお送りしています。しま君の仕事を手伝って、分担して下さる方お申出で下さい。

②・理想としては、東京都内各区で、自己周辺10人ぐらいの人への発送をひきうけ、手渡しできる人には直接訪問(カワイコチャンかも?)して、彼自身の新しい交流関係をつくっていく……ということ。

③・その他の地区でも、できるかもしれません。よしおれへワタシ)が……と、申出を!

④・40号の3は、9月中に発行予定。

営流的であること

宮園 多恵子

もう四日も前のことになるが、向井さんが自連紙に例の〈連合赤軍〉を〈統一赤軍〉と呼んで批判を試みたことがある。〈連合赤軍〉自身は自らを〈統一〉赤軍と称してその〈統一〉に力点を置いていたにもかかわらず、マスコミは〈連合赤軍〉と呼んでその野合性、不和性を暗に強調し、他方向井さんは〈統一赤軍〉と呼んでいみじくも彼の党派性を思案に押しだした、というのがことの次第である。〈統一〉は比較的市民権が与えられ、〈連合〉には疑心暗鬼、同じて和せずといったニュアンスがきとわりついているようであるが、マルクス主義諸党派は〈統一〉がことのほかお好みで、アナキスティックなご仁の多くが〈連合〉を対抗的に主張する機会が多いのは今にはじまったことではない。ことばには私的に意味が与えられることがしばしばあって、それは一種の造語術なのだが呼称にことさら執着するのは逆効果だ。

※ ※ ※

ことばの使い方だけから言えば今日、運動には四つの傾向がある。ひとつは大衆欺瞞＝権力言語迎合型で日共のそれ。例えばプロレタリア独裁をプロレタリアのディクタツールと呼びかえるが如き。ひとつは内実重点主義・プラグマティズム型、小田流ごろあわせ術で目的的であるとの非難はまぬかれぬ。いまひとつは啓蒙・復権運動型で〈自由連合〉がその例。のこるひとつが叛逆的自己陶酔型、滝田流逆手術である。

このうち、日共流の造語術はもともと限界がみえているし、その頽廃は手のつけようもないから問題外であり、やがて権力そのものへと融解していくであろうことも言うまでもない。小田流ごろあわせは、というと〈彼らの拠点そのものが分解しつつある今日、〉戦後民主主義政治の反解に呼応して失動していく。わたしたちは啓蒙・復権運動型か叛逆的自己陶酔型で勝負するほかないようである、もちろん両者がともに正しく有効であるということを意味しないのだが。つまり、自己が依拠する言語的拠点とその敵を明確に指定することをしなければならない。わたしたちには党派的な位置づけが欲されているのである。

※ ※ ※

このことをより具体的に述べるために、わたしたちは党派的総括の入り口に立とう。わたしたちはマルクス主義運動がよく口にする〈統一〉との連関において〈連合〉を対照的に主張してきた。たしかに同一の思想・同一の意志、統制された行動に象徴される運動は排他的で独善的な党派の乱立と運動総体の混迷を必然的にもたらす。しかしわたしたちは思想上の対立を〈連合〉によって解消することはできないのであり、敵対をおそれ、回避してはならないのである。だから、わたしたちは、ファナスチックなマルクス主義諸党派を敵にきわすことをためらうことはありえない。たとえばわたしたちは日共と連合はしないだろう。その理由は日共が排他的な組織論をゆずらない、という消極的で、運動上の表面的な構造にはゆめがたい。そうではなく、彼らの政治そのもの、いうなれば運動の目標や現状分析の相違を決定的な過誤として受けとめるところにゆめたいものだ。運動の目標というのはせんじつめれば人間のあり方、かかわり方の原質とは何であるかという問題に対する回答の中にあり、ひとりひとりの人生の生き様にかかわっている。わたしたちはユートピアを妄想する前に自分自身の生き方を言語化し、思想水準まで高める作業の中ではっきりとたとえば日共と袂を別たなければいけない。これこそが党派的自立を支持するのだ。

※ ※ ※

わたしたちはアナキストの党派も含めてマルキストの諸党派と思想的な問いを問わざるをえないことを充分認識すべきだと思う。自連紙上ではわたしたちは論争をうやむやにしてきた。というより論争を回避してきた、いや論争に至るほどの思想的な言語化活動を怠ってきた。自連紙は真の自由連合を生み出すための布石としてとりあえず運動の情報交換を運動の前提としなければならない。わたしたちはマルクスの連関において〈連合〉を対照的に主張してきた。たしかに同一の思想・同一の意志、統制された行動に象徴される運動は排他的で独善的な党派の乱立と運動総体の混迷を必然的にもたらす。しかしわたしたちは思想上の対立を〈連合〉によって解消することはできないのであり、敵対をおそれ、回避してはならないのである。だから、わたしたちは、ファナスチックなマルクス主義諸党派を敵にきわすことをためらうことはありえない。たとえばわたしたちは日共と連合はしないだろう。その理由は日共が排他的な組織論をゆずらない、という消極的で、運動上の表面的な構造にはゆめがたい。そうではなく、彼らの政治そのもの、いうなれば運動の目標や現状分析の相違を決定的な過誤として受けとめるところにゆめたいものだ。運動の目標というのはせんじつめれば人間のあり方、かかわり方の原質とは何であるかという問題に対する回答の中にあり、ひとりひとりの人生の生き様にかかわっている。わたしたちはユートピアを妄想する前に自分自身の生き方を言語化し、思想水準まで高める作業の中ではっきりとたとえば日共と袂を別たなければいけない。これこそが党派的自立を支持するのだ。

※ ※ ※

わたしたちはアナキストの党派も含めてマルキストの諸党派と思想的な問いを問わざるをえないことを充分認識すべきだと思う。自連紙上ではわたしたちは論争をうやむやにしてきた。というより論争を回避してきた、いや論争に至るほどの思想的な言語化活動を怠ってきた。自連紙は真の自由連合を生み出すための布石としてとりあえず運動の情報交換の場所的な役割を果たそうとし、そのために自連社の経営をうんぬんしてきたという経緯からはこの非難はちょっと酷でいくぶん的はずれであり、むしろわたしが必要を認めながら〈自由連合・理論〉紙発行の企画を具体化できなかった非力と怠惰を自己批判することに連なるのだけれども、わたしたちがその採用する組織論においてその内実がはじめから党派的であったにもかかわらず、思想とすべきを思想として押し出さずに単なる所見にとどめ、従ってやゝなまぬるい人間関係をだらだらと拡大してこざるを得なかったアメーバーの如き自己欺瞞を弾劾しなくてはなるまいと考える。その証拠にわたしたちはどんな友かは知らないがとにかく友は作ったが、どんな豊かな敵も作れなかったのである。せっかく自連一派、といかにも誹謗してくれたりがたい党派もあったのにへ能書きはどうあれ既成のマルクス主義諸党派のふるまいといっこうにかわらないほどぬけているというはなしだがわたしにはそのありがたい誹謗が届かなかったしけんかできなかったし、思想的に不具戴天の敵と目されるマルクス主義諸党派には見向きもされなかった。わたしたちのうちのたれいとりとしてマルクス主義の論敵、政敵たりえなかったことを恥じよう。思想的に問えなかったオ一の理由は自連社員はそのいとりとりが党派的であること、一人一党的であらねばならないことに無自覚であったからである。わたしは自連が果たしてきた役割を反古にするつもりはないが自連がなんとなくアナーキスティックであったことを許しがたい。

わたしたちは60年代後半における反安保闘争をあまりにも情念的かつプラグマチックに受けとめすぎてきたきらいがある。そのため運動の政治的敗北さらには思想的な敗北を運動をとにかく続けることによって陰蔽してきたのではないだろうか。

※ ※ ※

わたしはここ一、二年、一種の流行で共同体（運動）が脚光を浴びている情景を過大に評価することをためらいたい気持がある。運動と銘うってなされている「共同体」に限ってその実、貞的いろがりを欠いた単なる都市逃避にすぎないことがあるからだ。農村での共同体を今、とりあげるときには必ず都市＝権力の拠

良からの退却が明確に物語られなければならない。そしていかにその内構造が共産的であっても都市と都市農村間流通機能を矛盾的に受け入れなければ存続不能な擬似共同体にすぎないことがまず語られ、それを超えるための試行錯誤が付帯的になされなければ状況的に意味をなさないことが確認されなければならない。

70年代の前半は全ての革命的高揚の後と同じように思想的にも政治的にも実りの多い季節ではないだろう。押してだめなら引いてみる、といったたぐいのスライド現象が幅をきかせ、無責任きわまりない過大評価が巷を風靡するだろう。だれもかれもが知っているというのにどんな影響ももたらされない不思議が続くわけである。

わたしは自連編集社員が送られてくる原稿をただ黙々と整理する有給社員であるのならばただ自分が今、自連をどんな意味ででも利用しなければそれでいいと思うが、自連は主観的にはどうあれ客観的にはある傾向をもった党派なのである。その傾向には無関心でいるわけにはいかない。ある傾向を許容する理由を位置づけることのできない場合には自連は発行されてはなるまい。その限りでわたしは自連の解体に尽力したいと考える。非党派的党派は党派としての役割を現在、果しえない。「編集室」が浮き上るようでは自連はやっていけない。遅すぎたかもしれないが、まだ潮時だとわたしは思うのである。

いくとこ〜で ありたいと　木村和

自連紙が、今の私との出会いでもありました。自連とのかかわりは私にとってかなり密度の高い関係であると思っています。けれど、読者でしかないことは認めざるをえません。もっと身近にとらえられないのはどうしてでしょう。おこがましい言い方かも知れませんが、自連は自連の活動があり、また私は私なりに自連を読み、吸収して自分のものとして、そこから私なりの活動を進めてきたと思っています。

へその時は思い、理解できてな
か、危んです。こつには認められない

ものが、こんなところからくるのではないでしょうか。個人、地域の活動状況なり論文的な報告の情報紙であったし、私自身、そのようなものとして利用(?)してきたからです。また、身近な場所になかったというのも無関心にさせる原因の一つでした。といっても、名古屋でもやろうと思えばできたのですし……。現在、名古屋で大阪自連にかわって発行計画が進んでいます。

今私の職場の中がクチャクチャで、ここでも村八分にされていて、私自身、頭のてっぺんから足の先まで何が何だかわけのわからぬ状態で、全く考えることのできない精神状態です。機会をみて大阪へ一度いきたいと思っています。何も書けなくて申し訳ありません。

「ところで、今後は〈自連社員〉ですか？」

――少くとも自連社員でありたいとは思っています。

しんぼうよさの精神を　岡本栄

「自由連合」にはいつもアンケート用紙が送られてきていたが一度だってだしたことがなかった。こんな僕の社員失格の態度が自連を廃刊においやったのかもしれない。時には記事に関する感想をメモしたり、アンケート用紙に記入しはじめたりしたのだが、投函まで、こぎつけたことはなかった。

今反省してみると「めんどうくささ」のためになんと多くの誤りをくりかえしてきたことか。昔からの友人関係を疎遠にし、やろうと思った署名やカンパに協力できなかったり、みんな「めんどうくささ」のなせるわざであった。署名やカンパを主催している人、そして自連を編集している人々の努力に比べたら署名用紙に記入したり、カンパを送金したり、あるいは自連のアンケに答えるぐらいたやすいことである。しかしながら悲しいことに、「めんどくさい」と感じるその時点では、ここまで想像力が働かず、ずぼらになってしまう。

こうみてくると「めんどうくささ」ほど、人間にとっての敵はないのである。マスコミは毎日のようにキャンペーンをはり池田綾代をいつのまにやら自衛隊員募集しや、テルアビブの犯人にもたておげているではないか、継子扱いにされていた自衛隊も、正々堂々とパレードするようになったではないか。これらは、敵が「めんどくささ」に負けずに私達に対抗している証拠ではないか。「めんどくささ」に打克つかどうかが勝負の分れ目である。今あらゆる運動が意気消沈している。そしてあなたにも「めんどくささ」に負けかかっている。ベトナムでの米軍の暴虐は激しさを増しているにもかかわらず、あなたはデモや集会に参加することを「めんどくさく」思っている。

ふと今考えついたのだけど「自由連合をつぶそう」「つぶすこと」の意味は、とかくもねばり強く宣伝する自連の態度は、「めんどくささ」に負けてしまい、単なる読者に終始してしまっている私達へ「めんどくささ」に対する「しんぼうよさ」の復権を求めた警告と把えるほうが正しいのであろう。

ふりかえれば「自由連合」の存在自体が僕にとっては「めんどくささ」の象徴のように思える。「がり版印刷を続けるかどうかもめた件」「切手にのりをぬることのすすめ」「自衛隊のポスター変造のすすめ」、これらすべては「めんどくささ」に打克ち、そのめんどくさいことを楽しみ、趣味に転化することを、そして「しんぼうよさ」の大切さを私におしえてくれたような気がする。

そしてつぶれんとする今、「自由連合」は、だまって印刷を停止すれば自然消滅する体なのに、息たえだえに「つぶすことの意義を」「なぜつぶすのか」と「めんどくさい」と思えるほど叫び、「しんぼうよさ」の復権を訴えているのである。

空間 それとも 紙きれ?

自由連合という空間までをも解体するのか、それとも単に一手段としての「自由連合」という名の紙きれ誌を解体するのか？ 紙きれ誌ならやめるもやるもそちらの自由。しかし、空間を解体するのは……ギモンです。（清野岩志）

社告

六月中旬、姫路・自連社宛に自連特別号と死号を切手二〇〇円同封で申し込まれた女性、申し出て下さい。住所氏名がどこにも見当らないので、発送できず困っています。もし何ならAアジトまで取りに来ませんか。

これからも気軽なペーパーコミュニケーションとして

出口ハイル

お手紙拝見いたしました。

ある時は社員の面して、ある時は関係ないよってな態度をとっていた自分に、自連の〝つづけるか、つぶすか〟は重くのしかかってきます。そして、原稿を書けとのことですが、今のぼくにそれだけの内容も力量も、もちあわせておりません。また自分が書くことに対して、言葉のお遊戯をしているようで、つけ焼刃の歯がボロボロ落ちこぼれていくのをみると、とても人様の前にあらわすようなものは書けません。それは肉体の隅々まで化粧して、得意になってでてくる中年のストリッパーが、はじらいながら舞台に出てくる様に似ているのです。ぼくは自分の文章が読まれていると思うとき、自分のヌードショーをやっているようにはずかしいのです。(ハダカははずかしいことなんかな?)

だから、どうしても〝いま〟は書けません。したがって自連について書きましょう。

×　×

結論的に言わせてもらえば、ぼくは〝ツブス〟のに反対です。

「発展的解消」とかいうコトバがあります。よく民青をはじめとする権威主義者がもっともらしい顔をして、自己合理化を含みつつ居直る姿がそこにはあります。

ぼくには、自連を「ツブス」「ツブサナイ」(あるいは「ツヅケル」)というレベルで語られるのが、とても悲しい気がするのです。なぜそのことが大きな問題にならなければならないのかと……。また、ハジメルことよりもツブスことの方がはるかに難しいとも言っておられるけれども、果してそうでしょうか。もしその論理なら、「ツヅケル」というコトバはどの辺に位置するのでしょうか?

ぼくも東京で「東洋アナーキズム研究集団」とか「共同性発見集団」(赤坂コミューン)をやっていますが、ヤメル、ヤメナイはいつも出てきます。「東アナ研」には思想の科学のナスさんもいる関係上、「集団」について山脈の会やその他多くの実情やツヅケ方なども大いに論議されています。そして、ナスさんがいうには、サークルやグループは十年やらないと結論できないと強調し、内容はその次の問題として、とにかく続けることに全てをかけるということになり、低迷路線をさまよいながら結ばれています。

できた当時(二年前)は石原完爾や老、荘、そして大杉栄、石川三四郎の「虚無の霊光」などやっていたが、近頃は、〝生活の中のアナーキズム〟とかいって内容はかなりハレハレになってきました。たとえば、この次の集りまでに、暮しの中のアナトキズム性を感じたこと全員発表となると、電車広告でみたんだが、女性週刊紙の表紙はなぜ外人女性が多いのか、からはじまり、ヒンナップ、ヌードは西欧人が多いのかにエスカレートし、ヤクザ映画をみてきたんは、ヒボタンお竜はなぜカッコいいかを追求し、ツルミシュンスケの限界芸術論になるわけです。また、ある仲間が酔っぱらって無意識のうちに女性をなぐってケガさせた。するとそこから出てくる話は〝酔っぱらいは酔っぱらうと、なぜあばれるか〟という調子なのです。

×

話しがそれてしまった感じですからもどします。

ぼくが自連を読みはじめて、一番ショックというか、いまだにんにひびいてくるのは、「不まじめのすすめ」です。マジメな奴になにができるかという半ば逆説的なこの意見に、ぼくは共感しているのです。その論理からすると、自連は「カッコよく」ツブそうとしているようにみえるのです。マジメな人間たちが……。

しかし、ツブしたあとみんなどこへ行くのだろうか。同じことをくり返さなければよいが!!

自連に関わる人間、やはり魅になりきれない偽悪者集団なのだろうか。

ぼくは組織としてのべ平連運動からぬけて、ずっと一匹オオカミ的な存在だったけれど、その後、山岸会やキブツ協会を経ていくうちに自連にひかれていったわけです。

そして、それ(自連)はぼく一人の運動体として大きな精神的支えになっていたし、たとえ一人でも〝べ平連運動〟をしているという自信が湧いてきたのです。それは今でもかわりません。内容はともかく、それを、ガリ切りから発送までやっている人がいると思うと、その精神力には、全く頭を下げさせられる思いです。とにかく続けることによって、徐々に地下水道を拡げコンタクトしてゆく。これがぼくの考えであったわけだけれど、その怠慢さにあきれるばかりです。

五月に東京で行なわれた「負けるな市民集会」に行ってみたら、そこには、昔いっしょにやっていたべ平連仲間がウジャウジャしていたのです。そして顔と顔があうと、ヤァーとはいうけれど互いに気まずい顔をして〝今どうしてる?〟〟はずかしいけどなーんにもしてない〟〟オレも〟〟なんだかべ平連の同窓会みたいね〟〟へへへッ……〟と苦笑するという感じでした。べ平連運動(こういう規定があるのかないのか分らないけれど)は、今は最低の状態ではないでしょうかってなにをやっていいか分らない。集会さえあれば受身の形で参加する。自ら創り出す気配すら感じない。そのくせ、なにかしなければと……。だから、その意味で最低の状態だから、突然浮きあがる可能性を秘めているのではないかと思うのです。いま、その人たちは〝良き指導者〟を求めているのではないでしょうか。例えば、べ平連の出来たとき動きまわった小田実のような。

×　×

ぼくの精神的な指導者は自連であり、イオムであり向井さんの精神とアイデアだったのです。いまなにかの運動をやろうとするとき、自連や向井さんの影響が大きく影をおとすのです。神がかりや、権威をまっりあげるなんて感じではないから誤解のないように。

ぼくは時々〝おまえはムカイズムだ〟なんて言われますけど、それを心よくうけております。ムカイズムとはなんだか分らないけど、言葉の受け語りをするのではなく、日常行動のための方法論みたいなところが、共感的にみえます。

×　×

自連をツブサないで下さい。形式にこだわらず、枚数にこだわらず、毎月発行にこだわらず、自由に、ハガキ一枚でもよいから〝自由な連合〟をずっとずっと続けていきたいと思います。ペーパーコミューンは、パ

サバサになってしまったにぼくたちの心にうるおいを与えてくれると思います。たった一言がとてもうれしい時だってあるのです。自連の封筒のウラに「匿送金」なんて書かれると、なにかきだムシされていない、とコイドリして喜ぶアマエンボウです。へ下宿のおばさんは「匿送金」を人の名ときちがえて、ずい分かわった名の人を知ってるのねといってきました。ぼくの名も変だからっ）。もっと女々しく、だらしなく、デレデレ、ウジウジと、無責任に、不きじめに、無展望に、無節操にやっていこうではありませんか。前納残金は全てカンパします。

どうもメナクチャに思ったままを書いてしまいました。原稿は書けないけれど、いつまでも「自連社員」として、こしぎんちゃくのようにきとりついていたいと思います。

責任ということ・R

本日の朝日新聞に、ついに自連がのりましたねえ。なんつったって天下の朝日ですからねえ。大したもんです。もう最盛期っつうか、断末魔っつうか。

× × ×

この自連末期に、ぼくが最も感じたのは〝責任〟ということです。口にふられ、大学を退学になり、ふつうの人間のぼくらから見たらどうしようもなく世の中がいやになるような黒川氏が、なぜどうして、こうまでも自連にしがみついているのか。いや、自連を切りすてしきれないのか。ぼくらの仲間うちのことばで言えば「そりゃおめえ、好きだからだべさ」「どうしようもなく好きなんだべや」ということになるんだろうけれど、それだけではない何かを感じるね私しゃ。つまり、それが〝責任〟ではないだろうか。

ぼくは〝無責任主義者〟だ。だいたい、世の中に〝責任〟なんてものはあるのかい。例えば〝防火責任者〟が火事の〝責任〟を負って、損害を弁償するなんてことはあるかい。ぜったいにないよ。

やっぱりあなたは責任感が強すぎるんだよ。数千人の読者なんていったって、大部分はぼくみたいにどーしょーもないやつにちがいない。そいつらに対して責任感じたってしょーがないよ。〝仁事〟というのは、自らの内なる衝動によってなされるべきではないだろうか。

× × ×

〝衝動〟ぱっかりだったら一匹狼の単発テロを出ないい……けど……どけども、その人間の生命の一瞬の燃焼となるのならば、ぼくはその行為に対しては文句を言えない。その結果がぼく自身に関わるときは別だけど。

一方〝責任感〟へ人民に対する責任感。ぐっとダラクすると妻子を食わせなければならない責任感しなんかばっかだと、いわゆる官僚主義みたいになっちゃうんじゃないだろか。あんたも気ィつけなあかんで。もう手遅れかな。

でもやっぱり責任感がないと、組織化、組織的運動、運動の存続発展なんかないかな。へやりかけの仕事ばっかりたまってしまったりしてぬ〉そんなものなくていい？　なくちゃならないこともあるさ。

× × ×

ちょっと収拾がつかなくなっちゃったよ。いいかげんな問題提起とでも思っといてください。

自連の最後については、たった一回アジトにあそびにいって、ほかにもろくに参加しなかったぼくです、何も言えません。まあムリせんと、無責任でかきわへんで。

ためろ・やろめ（2）

佐藤雅久

『自由連合』40号、受け取りました。「つぶしきるまでつづく」とは全くいいことだ。大いに結構。だけどなかなかどうして、つぶしきることができるだろうか。むずかしい。「恋人との別れ」などと同じというが、ぼくなんかでも一〇年位前のことだって未だにつぶれきっちゃいない。『自由連合』となると大変なことなんだろう。大体、つぶれっこないという前提があればこそ、つぶすということにもなるのだから、人間というものは全くこまったものだと感心する。

40号を見ると、今までのと少しちがって、あっちゃこっちゃのいろいろな意見とかなんとかがいっぱい出揃っておもしろいと思っている。夏の夜、少しはすずしくもなる。

すずしい顔してこういうことを書いていると、もう一度さんでみようかということにもならあね。なんかちょっとジンなんかのんじゃって、裸電球の下で原稿用紙にグシャグシャ書いているが……。だけどやっぱり、あの娘のことが忘れられないでいるのと同じように、今になって『自由連合』のことが恋人のようになってくるのだから、全く自分でもあきれるよ。

カッカともえて、行くところまで行ったら、それでいいじゃないか。生成流転、流れにさからっていちゃおしまいなのさ。へ流れ〉というのは、権力と権威を基盤とする支配者の方向づけにへ流れ＝状況〉じゃないぜ。全く自然そのものの〈流れ＝情況〉のこと。レット・イット・ビーなのさ。

あきろめて行きます

山田一郎

今あなたはへ社員〉か？そう追及されるまで、自連は多分つぶれないだろうと力をくくっていました。べ平連こうべをつぶすことを意識して、昨年、11月行動を総括した時、どうしてもつぶせなかった。そんなこともありまして、自連もつぶれないだろう、と考えていたのです。

きに持ったものを捨てないと新しいものを持てないとか、そんなこと書いてあったですけど、どんぶりの形は一定なのでしょうか。もしも、そのどんぶりに入り切れないならば、どんぶりを大きいものにとりかえるというテもあったのでは？　そんなことも考えました。

ところで、べ平連こうべでの自連の評価は悪いです。「かっこいい理論を出しても、その運動と総括を出さないし」「運動体へ街頭〉でなく、知識的(?)文筆的(?)な〈同社だから、運動――権力に対して現実的な力を加える――がともなわない」。要するに、出しっぱなし、言いっぱなしに終ってしまっている、ということです。運動論そのものは、すばらしいと認めています。

40号、そのⅠ、そのⅡ……と出るならば、ぼくもあきらめて行ってみましょうか。どっちみち、自連からかくれようにかくれられそうにないんね。

たとえ。……出した方が

宮沢とり

40号でやめるそうですね。原稿を、ということですが……何だか改めてっていうと、残念ながら書けません。

私が初めて新聞を出した時は100部くらいであったと思います。それは一年も出さず、日天によって止めさせられました。そのときの絶望の毎日を思うと、くたばるほどつかれはてっていても、がんばりつづけていきます。そんな私が『ハタ』のほかにけんこうをかく、ということは、いったいどういうことなのか？　はげしい"いかり"さえおぼえます。東北と関西のどうしようもない"差"を感じます。

しかし自連はすきでした。何となく、見ないではいられませんでした。40号までつづくことは、それ自体でも、かなりのこうけんをした、と思います。釜ヶ崎のこと、具体的に知ったのも、共同体とかロの性について考えさせられたのも自連からでした。廃刊にするのは実におしいと思います。記事も、たとえ、かきあつめた記事でもいいから、出した方がいいと思います。

金沢にて

Y.S

自連、ひょっとしてつぶしそこなって――ぶっつぶすことによって続いていくことになるようなーいくんとちがいますか……と、ある声。

大阪のアジトにはいけませんが、ここにいてがりがり2、3枚やったらできます。自連廃刊号を発行するにあたって動くんたちと私との関係というふうには発展しないかもしれませんが、気持として、私のできる仕事といったら、カンパとがりがりくらいです。

金沢では、地域に根ざした運動をつくりだそうと、その歩みがはじまったところです。何やかやといそがしくなるかんじですが、あらゆる仕事を通じて、関係をつくるということは、自連のみならずと思いまして、がんばることにします。ヒマになれば、一度金沢に遊びに来て下さい。

表相のコミュニケイション

堀本吟

『自由連合』廃刊云々についての何合せなんだか叱咤なんだかわからないものが来ていますが、私には、あまり適切な思告はできません・送られたものはチラチラとでも読んでいるし、捨てないでとってあります。それは一年も出さず、日天によって止めさせられました。そのときの絶望の毎日を思うと、くたばるほどつかれはてっていても、がんばりつづけていきます。そんな私が『ハタ』のほかにけんこうをかく、ということは、いったいどういうことなのか？　はげしい"いかり"さえおぼえます。東北と関西のどうしようもない"差"を感じます。

しかし自連はすきでした。何となく、見ないではいられませんでした。40号までつづくことは、それ自体でも、かなりのこうけんをした、と思います。釜ヶ崎のこと、具体的に知ったのも、共同体とかロの性について考えさせられたのも自連からでした。廃刊にするのは実におしいと思います。記事も、たとえ、かきあつめた記事でもいいから、出した方がいいと思います。

金沢にて　Y.S

LIBERA FEDERACIO

自連、ひょっとしてつぶしそこなって――ぶっつぶすことによって続いていくことになるようなーいくんとちがいますか……と、ある声。

大阪のアジトにはいけませんが、ここにいてがりがり2、3枚やったらできます。自連廃刊号を発行するにあたって動くんたちと私との関係というふうには発展しないかもしれませんが、気持として、私のできる仕事といったら、カンパとがりがりくらいです。

金沢では、地域に根ざした運動をつくりだそうと、その歩みがはじまったところです。何やかやといそがしくなるかんじですが、あらゆる仕事を通じて、関係をつくるということは、自連のみならずと思いまして、がんばることにします。ヒマになれば、一度金沢に遊びに来て下さい。

『自由連合』廃刊云々についての何合せなんだか叱咤なんだかわからないものが来ていますが、私には、あまり適切な思告はできません・送られたものはチラチラとでも読んでいるし、捨てないでとってあります。それは一年も出さず、日天によって止めさせられました。そのときの絶望の毎日を思うと、くたばるほどつかれはてっていても、がんばりつづけていきます。そんな私が『ハタ』のほかにけんこうをかく、ということは、いったいどういうことなのか？　はげしい"いかり"さえおぼえます。東北と関西のどうしようもない"差"を感じます。

しかし自連はすきでした。何となく、見ないではいられませんでした。40号までつづくことは、それ自体でも、かなりのこうけんをした、と思います。釜ヶ崎のこと、具体的に知ったのも、共同体とかロの性について考えさせられたのも自連からでした。廃刊にするのは実におしいと思います。記事も、たとえ、かきあつめた記事でもいいから、出した方がいいと思います。

『自連』には、私好みの意識空間はどこにもみあたらない。といってそれを『自連』に持ち込めば、必ずものになると思います。そういう属性というものが、ジャーナル活動には自らついてくるわけです。自分が何者であるかをもっと鮮明に出す努力をされたらどうでしょう。表現及びそれを通じての コミュニケイションに専心するとしても、もっとも内攻的な場所にコミュニケーションの問題をひきこまねば、外に何って何かやる意味がない。書くことのむなしさは他人の責に帰すべきことではなくひたすら自分の責任なのです。

貴方は編集発行の責任者で、私は読む責任者で、だから二人あわせて『自連』である。と、こんな論法が貴方たちのよびかけには一貫していますが、グループ所有権を明確にされて、「人はここまでしかやらないのか、おれはここまではやる」と、こういう言い方をしていただけないものでしょうか。その言い方でいけば「私は当分、『自連』は読むところまでやる。面白くなければ読まないし」ということです。

× × ×

なんで読むだけにとどめておいてはいけないのかと、自連アンケートの押しつけがましさに少々うんざり。一々下手な文章で感想をのべなければやってゆけないのでしょうか。そして今まで実際に反応がきた場合、どれほど深刻にしてするどい読者分析がなされたでしょうか。何度も言いますが、表相のコミュニケイションにこだわらないで、書きたいことをキッチリ書いてゆけばどうなのでしょう。書きたいことがなくなったのなら、礼儀上簡単なあいさつをして、やめればどうでしょう。

（一四頁より）到達する前段階として、誤謬に他ならず、それゆえに革命の自明性は、現実の不合理性の存在によって、証しされているものとして信じられた。しかしわたしが、わたしの望みどうり、人間的に生きん人間的に死に得るのは、ぎりぎりのところで確信に転化し得ぬ未知をはらんでいたのである。まさにわたしは、この未知に一切を賭けようとしていたのだ。

現実の混沌の彼方にあるはずの、澄明な青空のために生きようとする少年ロマンチストとしての、わたしの思想的自己形成過程は、わたしが、戦争少年の一人であったことを証しているのだろうか。それとも、自らの現実的不遇を精神的に無化せんとする、不幸な体験を強制された少年にとっての、一般的な心的過程を、わたしもまた辿ったということを示しているのであろうか。

いずれにせよ、わたしの十余年の政治運動の体験が、確信的なアジテーションの裏側に白々しさをもちつづけてきたとすれば、こうした少年時の、現実生活からの逃亡に他ならぬ原初的な思想形成にとって、不可避の問いをなげかけているといえる。

＝プロローグ・ア＝

わたしはいま、わたしの現実的生活にとってわたしの思想は何であり、わたしのこれまでの思想にとって生活者とは何であったかといった問いをおしすすめつつある。いつおわるかわからないが、行為における問題は、つまるところ思想的課題として問いつめなければ、プラグマティックな行為を再生産するだけだと考えている。わたしの論考についての問いあわせは、左記へ。御健闘を祈る。

東京都文京区向丘二ノ三六ノ八
梶谷荘三号
白川　透

社告

SSSSSSSS

Ω40号のその1・2・3……と漸次部数を減らしていきます。そのため、一年以上音信のない方は、多少前納残金があっても打ち切る場合があります。どうしてもそれが困る方は、その旨御連絡下さい。その折、自連っぶしに対する意見・感想を添えていただければ有難いです。

Ω尚、40号その1から一切書店置きしていません。入手希望の際は、直接自連社へ申し込んで下さい。